三河アララギ

２０２２年 令和４年１１月 霜月（しもつき）

十　一　月　号

第 六十九 巻　　第 十一 号

ニューヨーク日記（193）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

LOTS OF OYSTERS

Blue Shoe Diaries

今年の夏は1ヶ月ぐらいロスにいました。私もごはんの写真を撮る派で（日記感覚でいいじゃん？）あとから見てみたら外食の時ほぼ毎回生牡蠣を食べていました。毎回美味しかったから自然にメニューに載っているとオーダーしてたみたい。写真のオイスターは今回一番お気に入りのレストラン、Found Oyster と言うところのです。メニュー全てが美味しくっている間に２回も行ってしまいました！ また食べに行きたい。

I was in LA for about a month this summer. Like everyone, I tend to take pictures of my food wherever I go. And I noticed that in just about every meal at a restaurant, I was having fresh oysters! All of them were really good so it made sense that whenever raw oysters were on the menu, I ordered them. This one is from this great new restaurant called Found Oyster where I found everything on the menu to be outstanding that I had to go twice.

目次

第六十九巻第十一号（通巻八二七号）

表紙・隠岐神社　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記(193)　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「草々後集」　今泉　米子（5）
昭和47年二月号作品　大須賀寿恵（6）
昭和47年一月号作品　夏目　勝弘（7）
昭和47年一月号作品　岡本八千代（8）
九十五歳の誕生日　弓谷　久子（10）
聖観音菩薩　今泉　由利（12）
秋深みゆく　安藤　和代（14）
主婦業　清澤　範子（16）
自転車止めて　山口千惠子（18）
秋なのに　杉浦恵美子（20）
広々と　伊藤　忠男（22）
回腸導管　白井　信昭（24）
手書きの歌は　矢崎　直人（26）
『ことよせ』　いーはとぶ
鈴木美耶子（28）
吉見　幸子（28）
牧原　正枝（29）
森　厚子（29）
山崎　俊子（29）
伊藤　晴江（30）
水野　絹子（30）
牧原　規惠（30）
稲吉　友江（31）
現代学生百人一首　東洋大学
福戸　優衣（32）
八木　義仁（32）
上野　志織（32）
深澤　璃子（32）
杉本麻由花（33）
石田　七海（33）
丸山　智（33）
原田　皐汰（33）
植村　公女（34）
木村　歩歩（34）
今泉　如雲（35）
今泉　由利（35）
矢崎　直人（35）
『俳句』
五感を澄ませば（5）　杉浦恵美子（36）
附録（五）　矢崎　直人（38）
『生命の尊厳と言葉の軽重』　中屋　保之（40）
楽しい時間（120）　山本紀久雄（42）
『酔いの徒然』（127）　丸山酔宵子（44）
青春に年齢などない　高橋　育郎（46）
絹の話（144）　今泉　雅勝（48）
「江上浩二の独り言」59　江上　浩二（50）
初狩便り12　花野みぷり（52）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（54）
康鍼治療院　玄　翁（56）
清月閣大人に寄す　横山　精真（58）
編集室だより　今泉　由利（60）
隠岐の島　岳精流日本吟院
川口カルチャー吟行会（61）
「三河アララギ」について　（62）

歌集　わが冬葵

御津　磯夫

植物にも雌雄のあるはあたりまへいまだ知らざりししらくちづるを

門をいづること稀にして庭の徑に志賀山寺の青萩くぐる

あやふかりし日をさへ今はなつかしむ妻に紫の彼岸花咲く

裏庭のこほろぎと銅ふすずむしと聲のあひだにわがねむりあり

明日は明日はといひつづけつつ明日のなきつひの一日に到るなるべし

かくれみの柊ともに老いぬればその葉まどかになりゆくといふを

海屋（かいをく）の山田公雪冤碑（せつゑんひ）の拓法帖つひにわが掌にのせて披くか

琴を覆ふに足るといふとも雨に風に破れ易きをわが愛すべし

三百十五萬のいのち消したるのちにして一日やうやく平和を誓ふ

南青山の砌の鉢に見おぼえの細葉の擬寶珠はわが砌にも

歌集「草々後集」

今泉米子

もの音もなき雨の間のまひるまを野鳩鳴きあふ屋敷の森に

昼も夜もたづさはり来て六十年医の家の仕事過ぎゆきにけり

ゆつくりと己の薬を包みをり今日より六十年の医院閉ぢたり

ライラックの花ほのぼのと見えをりて薬室の窓今日より閉ざす

明け放つ窓にゆらぐは花アンカンサス大方のことは恵まれて来し

わが窓より見えゐて飽かず真球（またま）なす丹椿の実の朱錆のいろ

折々は窓変へてひとり休むべしもちの木樫の木の緑かさなる

風鈴の短冊ゆれざるまひるどき寝椅子の上にまどろみてをり

向日葵の脇芽の花が瓶にありわれは幾日庭をも歩まず

庭をさへ歩まぬわれに灯の下のカップに開く月下美人の花

昭和47年2月号作品

大須賀寿恵

杉の葉の散り散く屋根をはるかに見て東照宮に詣でず降りむ

誰(た)が署きてゆきしか杉の自然木杖に拾ひて降らむとする

両の掌を我に差し出し筋の萎縮見せ給ひけり二月前に

腕時計はめたる位置に落ちつかず体重の減り侘しむ今に

屋敷畑鋤きゐるらしき鍬の音里の一つが光り初むる時刻(とき)

浮き漂ふ芥のあひだをメダカが泳ぐ明日の元旦雨来るらしき

病欠印半休の印しばしばなりし今年最後の出勤簿を押す

わが家に風呂を立つるは久にして木蓋の桧しきりに匂ふ

霜おきて青葉保てるブロッコリーわが足癒えむ今年の春は

あぐらかけば真似る子きたりこの夜は食卓の下に病む足伸ばす

昭和47年1月号作品

夏目勝弘

合理化といへる言葉の現実に我が郵便局の交換室にも
争ふは時間の損と知りしこと今は楽しく思ひてをりぬ
夜を通し話ししこともあはあはと声のみの友今いづくに
ひたすらに話しをしたき夜もありき何故ならむと思ふことなく
応答の遅きをいひて交換室に怒鳴り込まれしことも幾度
交換室の窓に添へる柿畑の裸木今夜は風に鳴りゐる
コスモスの活けあるコップそのままに交換室に人影はなく
新しき職場にゆきたる友らのこと話すでもなく曜日はすぎぬ
床板の軋むはられし広々と局舎に一人宿直するは
合理化に去りたる友等それぞれに遊びに寄るは寂しきものよ

昭和47年1月号作品

蒲郡　岡本八千代

ところどころに咲き遅れの萩の咲きしなひ万葉歌碑への山道明るし

海に映る昼あたたかき冬の日のかがよふをただわれは見てをり

たけ低きヒサカキの名をまた忘れ万葉歌碑への曲り道楽し

亡き父の墓に供へむヒサカキを手折りて置きぬ土手下蔭に

おほかたは葛の覆へる草叢に昼のこほろぎ短く鳴きぬ

渚近き草叢の辺にわが立てば声の短き昼のこほろぎ

おそ咲きのむらさきの萩の下蔭を記念歌会のわれらは通る

ひらひらと舞ひ来し小さき黄の蝶の行方追ひつつ近道くだる

ほのほ青き瞬間湯沸器に近くをり女教師われの日直八時間

きのふ植ゑし珊瑚樹の垣に添ひて歩く午後の巡回は校庭にして

ふたたびの冬めぐり来て亡き父の風知草に風ふきわたる

天然石の黒水晶と思ひつつ揃ひの指輪君とつくりき

夏暑き歌会の帰り君とゐて特売場に甚平選びき

同じ指輪つくりて我らアララギの歌をはげまむ約束をしき

青年期の息子二人に甚平を君は買ひたり我も見たてて

九十五歳の誕生日

豊川　弓谷久子

大型で強くておまけにゆっくりと台風十一号日本海に向ふ

法師蝉短かく鳴きたり暑き陽の中にもかすか秋の気配す

中秋の名月夜空にぽっかり浮かぶおとぎの話の世界の如く

誕生日おめでとうとメールあり九十五歳の我が誕生日

誕生日を今年も祝いて貰いたり生きゐる事を喜びとせむ

我よりもひとつ年上英国のエリザベス女王逝去のニュース

美しく老いて慕はれ病まずして逝かれし女王羨しと思ふ

暫くは刈らずに置かむ雑草の中に一むら咲きゐる萩を

「長生きしてね」と添え書きのありみさとより届きし菓子の詰合せ

町よりの折詰料理の昼御飯子と分け合ひぬ今日敬老の日よ

連休を無情の台風大雨の災害ニュース心痛みぬ

矢勝川の土手に咲きたる三百万本のヒガン花テレビは今写しをり

南吉の里を訪ねて矢勝川のあの土手歩きし日もありき

貰いたるお萩大きし子はきな粉我はあんこの彼岸はての日

誕生日敬老の日に秋彼岸心忙しき長月なりき

聖観音菩薩

東京　今泉由利

何をしてゐるか！少しづつ彫り上ってゆくよ聖観音菩薩

聖観音菩薩となりゆく檜材と彫刻刀と手順整ふ作業台

梵語での「神聖な」意は「アーリャ」「聖」の起源であると

何事であるか理解の出来ぬまま固き檜材彫り続けゐる

丁寧にやさしく清く常の日の自身の心を託す彫刻

冬立つる日の近づけりこの日々をひたすらにして聖観音菩薩

目の覚めるような一つの旅を終へ心に残る大き確信

地球上に化石の出来るその頃に蘇鉄は生きる植物だった

二十億年前の地球に在りといふ蘇鉄のことを吃驚す

育ちたる庭に蘇鉄のありしこと蘇鉄と四季を過せしことを

沖縄から九州南端の間だけ自生してゐるという日本の蘇鉄

蘇鉄の実は徐毒をしてデンプンとなし団子餅味噌醤油

皮をはぎ芯を輪切に発酵後飢饉食になりたることを

育ちしは菩薩寺の石垣組の大蘇鉄緑豊かに頼もしかりき

仏教と共に日本に来たりしか食となり薬であり実殻は燃料肥料でありき

秋深みゆく

豊川　安藤和代

夏休み児の宿題の朝顔も少し疲れて二学期始む

有終の美をば保ちて黄のカンナ登校児待つ二学期の朝

小さくとも吾が足跡を残さんと短歌詠みきて六十余年

楽しみも喜びも又悲しみも短歌に詠めば心の和む

ギラギラの残暑の庭に鶏頭と松葉ボタンは颯爽と咲く

目が悪い手が痛いとの友なるに里芋コロリン絵手紙届く

生活の一部となりし新聞の休刊日なればひと日さみしき

来る度に吾が肩揉みてくるる娘よ最高の幸全身あふるる

「たねや」と言う菓子屋のあれば「キャン」と言う美容室ありて吾が町楽し

吹く風に秋はゆるりと近づくや紫式部の色の増しくる

蝉からのバトンを受けし蟋蟀の声聞く庭に萩の咲き初む

夫逝きて四度目の秋よ小菊咲きあの日と同じ風のさわやか

リハビリに夫折りし鶴色褪せてかたむきしまま本棚にあり

花終えし野道に四ツ葉のクローバーさがす幼と犬と秋蝶

さわさわの菊の葉陰に蟷螂の動きゆくりと秋深みゆく

主婦業

豊川　清澤範子

今日もまた膝(ひざ)に痛みを感じつつだましだましの吾の主婦業

赤青黄と色どりよろしき薬のむそして始まる吾の主婦業

まず吾は朝食の食器を洗わむと台所に立つ秋の虫なきゐて

九月に入り台風は12 13 14号雨を降らせて行き過ぎにけり

亡き夫の遺影に合うは二日振り二度の読経心静まる

スーパーが近くにありて買物も三ツの店に行くは楽しも

若者の食べるものとは言ふけれど今日の夕食にマックは美味なり

空晴れて今日の娘は気嫌よしシャワーしながら歌うたいつつ

14号台風は次第に小さくなりました吾が家は台風の通り道なり

お母さんたまにはこんな夕食もいいじゃないドライブスルーのハンバーガー

今朝は二十二度と十月の気温娘はカーデガンはをり買物に出ず

八月の盆を過ぎるも暑さあり廊下のサボテン水は多めに

日中は猛暑に汗を流しをり夜は虫なく秋の気配に

新聞の台所情報参考に献立作るも楽しみのうち

よろける吾の手を引く娘と買ひてこし大根コトコト煮るよ今夜は

自転車止めて

春日井　山口千惠子

姉妹ともに教師になりし孫二人夏休み終はる一日訪ね来

堤防に枝はり巨き桜の木切られ白きガードレール立ちゐる

厨辺に切り泥みゐる大き南瓜息上がりたり力なきわれ

窓打ちて突然雨の降りはじむ遠き南に台風十一号

新聞の天気予報は晴れマークわが住むところまず見てをりぬ

扇風機の羽根に付きたる綿埃ぬぐひとりたり夏の日過ぎゆく

信号の脇にひろがる草畑に放し飼ひなる山羊の草食む

草はらにひたすら草を食む山羊を自転車止めて眺めてをりぬ

牛乳パックすすぎし水をそそぎゐるモンステラの鉢に小さき芽生え

弱々と芽生えてをりぬモンステラ乾ける鉢に水そそぐとき

用水の水清らに流れゐて流れに逆らひアメンボ泳ぐ

休耕の田より飛び立つ白鷺の白極はまれり目に追ひ見てをり

繁りたる夾竹桃の枝の下「森町城址」の白き標立つ

夕近く日差弱はまる道をゆく狗尾草の穂そよぐ道

一本の弱々赤き彼岸花畔おほうメヒシバの穂の中

秋なのに

蒲郡　杉浦恵美子

秋なのに蚊の五月蠅さに思ひ出づ夫の最後の入院の日々

何処より侵入せしか蚊の一匹病臥の夫の枕の辺り

ひと昔以上の些細な一場面再入院の夫の病床

この叢書三巻足りぬ我が夫は定めし飽きて仕舞ひしならん

かのやうに夫の蔵書を手に取りて架空の会話も思はぬ悦び

では我は足らぬ三巻買ひ足して夫の知らない続きを読まん

阪九フェリー船内探検してる間に明石海峡大橋見逸れにけり

くぐる時見上ぐる筈の大橋が夜の海峡遠ざかり行く

名も知らぬ小島の灯ゆるゆると近づいて来る瀬戸内クルーズ

歩めども歩めどもまだ端遠し大宰府政庁跡は涯なき

背負ひたるリュックと背の間汗みずく大宰府政庁端まで歩めば

バイト生は外国人か訊ぬれど不得要領の返答なりき

弟と見紛ふ人が通り過ぐそんな筈ないあれじゃ若過ぎ

弟と会ってないなあコロナ禍の三年行き来の理由がない故

牡丹餅もちゃちゃっと作れり仏壇に供へし後は我のみ頂く

広々と

大阪　伊藤忠男

虫の音に誘われ庭に出てみれば煌めく星に迎えられるや

日も月も西の彼方に姿消しとって替わるか星月の夜に

あの空を自由に翔けるアトムならそこがどんなか分かるはずなり

水面に星空映るか目を凝らす光弱きに探しあぐねる

久しぶり南の空に流れ星願う間なしやあっという間に

大空の星の輝き見るにつけ小さき我に恥じ入るばかり

「はやぶさ」の惑星探査見事なり地球の祖先見え隠れする

力のみ広がる世界摩訶不思議ブラックマターと人は呼ぶなり

目に見えず時も無しとて真空の中に揺らぎがあるというなり

耳すまし目を閉じじっと聞き入るも夜空に今は音何も無し

峠超え西に下れば黒竹の原谷すでに明かりが消える

夜道でも辺りが見える星明り道端続くコスモスの花

ちょいの間の僅かな道も天と地を分けるがごとき隔たりがある

八十を目の前にして世の中の広さを知るはまだ若きなり

人は皆ここ来て何しここを去るあっという間のひと時なりや

回腸導管

豊川　白井信昭

雲行きの怪しき空に洗濯物一時干してはまだ取り込みたり

病院の中二階の喫茶にてまとめをり三河アララギ歌稿

道端に繁りたつ草刈られ青草匂ふ農道をゆく

堤防の彼岸花蕾ほつほつと夕日に染まる引馬野の里

妻が乗る古き自転車カゴ袋前後（まえうしろ）に付け未だ現役

この月も免疫さがり抗生剤朝げの一錠われの始まり

農道を自転車の前を横切るは茜トンボか秋は来たりぬ

膀胱の全摘手術近づきて何をすべきか思いつかざり

R23海岸通り遠面にも弘法大師像山の上(へ)に見ゆ

幾度かみる積厳寺にそびえたつ弘法大師は海に向き立つ

空海の知多半島の布教より一、二〇〇年令和の今年

九月下旬膀胱摘術近づきてうつうつと医者に聞きをり

ひと夏に孫の手足は伸びたらし二階窓に立ち新幹線見ゆ

再びを膀胱手術全摘の全身麻酔に眠るわが九時間

麻酔さめ個室のベッドの上(へ)回腸の管に繋がる命なりけり

手書きの歌は

埼玉　矢崎直人

黒き雲稲妻に雨降り始む部活の学生帰り急かさる

越えられぬ壁に向かいて飛ぶ飛蝗捕まへ外に放してやりぬ

秋分や週末ごとに襲来す台風進路の予想合戦

水を遣り根元の土に染み入らば葉の呼吸する匂い立ちくる

よく生りしキャベツ畑の白い猫まなこつむるも耳は動いて

黒猫の赤い舌出す「バイバイ」に赤い風船見送りながら

「こんにちは。いつまでもお元気で」敬老の日は誰彼にも

記入台コロナ対策パネル越し私も同じ失業の人

久し振り革靴履いて靴擦れし皮むけ痛し血が滲んでる

ジョギング中忘れていた事思い出し風呂に入ってまた思い出す

動きたら動きたなりに見えてくる道に向ひて進める歩み

深呼吸イメージ一つしてみる深呼吸する私が視える

思ふまま心のままに肩肘を張らず気のまま生きてゆきたし

すべき事やりたき事に出来る事やりたきに付く今出来る事

動く手に綴るる事の言の葉に心を映す手書きの歌は

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

テーブルの向き変へたれば北の窓赤き電車が今し駅へと
幾度も孫たち抱きて見せしかな今日もひとり見る赤き電車を
息子らの家族写真とわれら二人切り貼りをすれば勢揃ひかな

鈴木美耶子

桧扇と秋海棠と野ボタンよ今年も咲きしわが路地庭に
静けさよ地区展終へし甲山閣外されゆくは設営の板戸
庭の芝雨に打たれて伸び伸びて芝刈り終へし緑に光

吉見幸子

一週間孫と二人の食事なり孫が好みの酢の物続く
暖かきご飯手早くつぶし居る孫が作るは五平餅とか
「学校では教えてくれない大切なこと」旺文社のシリーズかもね

牧原正枝

コロナ禍に人は来ずとも盆提灯鬼灯お萩瓜の馬供ふ
幾つもの野ボタン咲けり散るもあり思ひ出す会君も君も笑顔
叔父叔母に母の近況伝へつつ絵手紙に書く自愛の願ひ

森厚子

カーテンの隙間から見ゆ白銀の月しろじろと今日は鱒二忌
傘を打つ雨音聴きつつ散歩するどこまでもただあてもなく行く
木々の間を忙しく飛ぶ燕らよ遠く飛び立つ日の間近かよ

山﨑俊子

「城の崎にて」学びし時より憧(あこが)るる地隣の友に「ここが城の崎ね」と
志賀直哉泊まりし部屋の窓辺より紅の花百日紅見ゆ
柳揺れる大谿川(おおたにがわ)に思ひ起こす「城の崎にて」の鼠(ねずみ)のことを

伊藤晴江

本堂に涼風横切り焼香の紫煙くゆらす父十三回忌
車椅子のわが母真中に四世代何より優る父への供養か
ああ今日はキャンセルをした旅行日か思ひ起こさす「お知らせメール」が

水野絹子

いつの世も昔なつかしの繰り返しどこまで行くも進化あるのみか
充分に便利なる世と思へどもとどまる事は永久に無きかな
季節感目まぐるしくも変化あり畑の暦は予定の立たず

牧原規惠

八月の酷暑の午後のひと時を物思ひつつ平和願ひつつ

貰ひ苗に混じりて朝顔の一花が今日は咲きをり空色三つと

貰ひたるツヤツヤ元気な夏野菜ナスの煮浸し冬瓜汁も

稲吉友江

現代学生百人一首

東洋大学

汗かいて怪獣マスクあごにして弟走る夏の公園

三輪田学園中学校一年（東京都）　福戸優衣　14歳

軒下は腹を空かせた燕の子早く逃げろよ番（つが）いの蜻蛉（とんぼ）

早稲田大学高等学院三年（東京都）　八木義仁　18歳

ダンボール開けると秋の味覚たちつめ込む祖父の笑顔が浮かぶ

神奈川大学附属中学校三年（神奈川県）　上野志織　15歳

「行ってきます」奇数の君からライン来て「気をつけてね」と偶数の私

神奈川大学附属高等学校一年（神奈川県）　深澤璃子　15歳

レジ前で親分みたいなおじさんのバッグ持参にちょっとときめく

神奈川大学附属高等学校二年（神奈川県）　杉本麻由花　17歳

コロナ禍でリモート授業の新学期友達作りはＺｏｏｍにＬＩＮＥ

鵠沼高等学校二年（神奈川県）　石田七海　17歳

授業中微塵も動かぬ長針が休み時間にスパートかける

慶應義塾普通部一年（神奈川県）　丸山智　13歳

寝室の掃除で見つけたアルバムの小さな手形に手をそえてみる

慶應義塾普通部三年（神奈川県）　原田皐汰　15歳

『俳句』

スキップで追いかけてをり夏野原　植村公女

ワンコインランチの列や雲の峰

虹の端に夫ゐるらしき心地あり

ひととせのいのちの力蝉しぐれ

腕相撲手首かえすや秋の天

秋天のはじっこらしき子猫鳴く　木村歩歩

喜寿近しコスモスの丘クラス会

白杖や小鳥の声に一休み

名月や木星土星を従えて

墓もなく草むらにひとつ彼岸花

秋風や白線引きの運動場

鮭颪益次郎武揚の書も
ひび入りしバス待合所海猫帰る
七色の稲で田に描くさざえさん

今泉如雲

白露も怒濤の波もＨ２０
秋分の朝陽来たれり東窓
父と居る母も居ります秋分の日
見ゆるもの感じることごと秋うらら
赤ほどに赤くなくして吾亦紅

今泉由利

図書館に行く道端に韮咲きぬ
八石（はちこく）のバス停前に落ちし栗
傘持つ手痛くて秋の蚊の喰へり
天高くぐんぐんのびる飛行雲
羽根落ちぬ喰いかけの柿鴉鳴く

矢崎直人

五感を澄ませば（5）

杉浦恵美子

大嘘こき

先ごろ師の許に伺って、よもやま話をしていた折「先生は芸術家」と申し上げると「芸術家じゃない、大嘘こき」との切り返し。

その時は大笑いしたのですが、帰宅してからこの「大嘘こき」を舌の上で転がしているうち、二つの意味で何と深い言葉だろうと気付きました。

一つは「嘘こき＝虚構性」について。

勿論悪い意味での嘘は印象がよくないものの、世の中は様々な嘘に溢れています。

また人は人と交渉する限り、或いは自分に対してさえさまざまな嘘をついています。

そこで試みによく知られた歌人の代表作から「嘘こき」の例を挙げてみましょう。

真砂なす数なき星の其の中に吾に向かひて光る星あり

（正岡子規）

「吾に向かひて光る星」なんてある訳ない。大嘘です。

そういえば子規は凡河内躬恒の「心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花」を、嘘の歌と酷評していたのではなかったか。お互い様ではありませんか。

たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三歩歩まず

（石川啄木）

この歌が詠まれた明治41年は、母はまだ上京しておらず、同居していなかったらしい。つまり嘘。

髪五尺ときなば水にやはらかき少女ごころは秘めて放たじ

（与謝野晶子）

歌全体がロマンティックな空想の世界でしょう。

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

（俵万智）

一世を風靡したこの歌、最初は「唐揚げ」だったとか。「サラダ」の方が正解と思われるけれどいずれにしても

嘘。しかし読者はそんなことに目くじら立てたりはしない。

思いつくままに嘘の例を挙げてみました。そのことにケチをつける気は毛頭ありませんし、第一単に写生だけの歌を見付ける方が困難。

むしろ作歌の虚構性について改めて気付かされたと言いたいのです。師の「大嘘こき」と云う言葉によって。

たとえ子規が提唱し、近代短歌「アララギ派」の重要テーマである「写生」においても「嘘」とは無縁だとは言えないのではないでしょうか。

三十一文字という制約の中で、何かを訴えようとしたら「謙遜的な意味」で「嘘」になるということを、我が師は端的に仰ったのかと思い至り、宿題が完了したように嬉しくなりました。

もう一つは大嘘こきの「こき」について。

もし我々が言うなら「大嘘つき」でしょう。今聞くと嘘こきは古風、或いは田舎風な感じ。そこに何とも言えないのどかさがあります。

言葉というものは時代とともにどんどん変化して行きます。新しい語が次々と出現するのと同じくらいにもう使われない語も沢山あるはずです。

そういう時、昔の言葉を生きた語として耳にすると、懐かしい穏やかな感覚が胸に広がります。

言葉というのは何と底知れぬ力を持っていることでしょうか。今更ながら思います。

大嘘か小嘘をついたか知らねどもわたしが生きてるこの世も仮の世

附録（五）

矢崎直人

二〇二〇年の四月から一年と十か月、大塚駅から歩くと十五分ほどの会社に勤めていました。池袋駅と大塚駅の間、山手線や湘南新宿ラインが走っている線路は元々川が流れていたといわれており、歩くとかなりの高低差があって坂の上り下りが大変でした。定時で帰る時は学校帰りの子どもたちと並んで歩くこともありました。さすがは子どもたち、追い掛けっこをしながらその坂を駆け抜けて行きます。

駆け下りて駆け上がる坂駆けっこの北大塚の子らに抜かれる

平日の月曜日から金曜日まで、九時から十七時までの勤務でした。昼は十二時から十三時まで休み時間があり、ご飯を食べてから二十分ほど散歩をするのが日課でした。坂の途中には昔は空蟬橋のたもとにあったというお稲荷さんがあって、朝、昼、夕と日に三度お参りをしていました。

帰り道お稲荷さんにご挨拶丸く大きな満月見つけ

空蟬橋から大塚駅を見るとちょうど正面に東京スカイツリーが見えて、線路が真っ直ぐに延びていくので面白い

風景でした。天気によっては雲に隠れてしまったり、夜にはライトアップされて時間や季節によって色が変化して綺麗でした。空蟬橋を渡ってしばらく行くと左手には大塚台公園があります。ソメイヨシノ、ツツジ、アジサイ、イチョウと四季折々の風景が見られました。また、北海道から運ばれた蒸気機関車がありました。真夏の暑い日には人の姿は全くありませんでしたが、蟬時雨が降り注ぐ中でも思いの外暑さには強いのか沢山の鳩が群れていました。

ひとけなきＳＬの待つ公園に蟬時雨降る鳩が群れてる

その先には都電荒川線「東京さくらトラム」の線路にあたり、線路沿いの大塚駅と向原駅の間に「南大塚バラロード」がありました。地域の方が育てている五百種類もの薔薇が五月頃と十月頃に咲きました。ゆっくりとした動きの電車と風に揺れている薔薇に、踏み切りの音ものんびりに聴こえました。

白さうび都電の風に吹かれ揺れ

『生命の尊厳と言葉の軽重』

中屋保之

『八月や六日、九日、十五日』、七十七回目の夏が過ぎていった。どうも今年の夏は、いつもと様相が異なっていた気してならない。このところ起きている事象が『異常』なのである。とにかく、暑い!! そして、コロナ禍の第七波もまた『異常』な勢いで拡大しており我々を不安にさせている。最近の天気予報では、かなりの頻度で「記録的短時間大雨情報」というのが流される。数年に一度程度しか発生しないような短時間の大雨のことである「線状降帯」という言葉も目新しい『異常』を示している。

なかでもこの七月に、衆人環視の中で起きた安倍元総理銃撃事件に到る経緯の『異常』性には驚愕しかない。また、事件現場でのマスコミの報道姿勢も私には『異常』に思えた。それに付随して起きている事象で連日マスコミを賑わせている相当数の政治家たちの立ち居振る舞いの『異常』なまでの醜悪さには呆れるほかない。

私たちはここ数十年の間、「生命の尊厳」と「言葉の軽重」というものに無関心でありすぎたと思わざるを得ない。命の大切さや言葉の大切さは、人として生きてゆく上で最初に習得すべき基本で、そしてそれは、私たち人間だけに習得できる貴重な資源だといえる。たとえ肌の色が違おうと言語が違おうと、人類共有の財産であることに異論はないはずである。毎年訪れるこの時期はとくに、「生命の尊厳」と「言葉の軽重」を問う好機と言えるのではないか。全国戦没者追悼式における時々の天皇のお言葉には、「生命の尊厳」と「言葉の軽重」が象徴的に表れているように思われる。個人的な受け止め方をお許しいただけるなら、昭和天皇の追悼の辞の中には、戦争当事者としての様々な苦悩や悔悟が滲み出ていたような気がする。沖縄戦で家族五人を失ったというある遺族は、「天皇陛下も沖縄戦にはすごくお心を痛めていらっしゃるという気持ちは伝わってくるから、本当はありがたいと感謝の気持ちを持たなければいけないと思ったのですけど、どうしてかやっぱりそういう気持ちにはなれなかったというのは事実です。皇室のほうで、この戦争を止めることが出来なかったのかな」と心情を吐露している。想像の域を出ないが、昭和天皇も戦中から崩御されるまでその思いが根底をなしていたのではないだろうか。そして、推敲に推敲を重ね

た言葉であるがゆえに多くの人々の心に響いたのではないだろうか。つまりは、「心」から発した言葉でなければ「心」には届かない、ということであろう。

（お断り　ここでの「生命の尊厳」とは、〝自分の命と同様に他者の命も大切にする〟の意に留めて筆を先に進めることとする）

詩人であり文芸評論家の大岡信はその著書に「人はよく美しい言葉、正しい言葉について語る。しかし、私たちが用いる言葉のどれをとってみても、単独にそれだけで美しいと決まっている言葉、正しいと決まっている言葉はない。ある人があるとき発した言葉がどんなに美しかったとしても、別の人がそれを用いたとき同じように美しいとはかぎらない。それは、言葉というものの本質が、口先だけのもの、語彙だけのものではなくて、それを発している人間全体の世界をいやおうなしに背負ってしまうところにあるからである。人間全体が、ささやかな言葉の一つ一つに反映してしまうからである」と記している。耳障りが良いだけでは折角の名演説も「軽」くしか聴こえない。そこに「心」が感じられないと空虚な時間だけが流れることになる。通信手段の利便さ、簡素化が高まり、人と直接言葉を交わす機会が減ってきている今日こそ「言葉の軽重」がより問われる時代になったのではあるまいか。我が国の美徳のひとつ〝以心伝心〟は、マスクが必需品となった昨今では死語となった感がある。だからこそ表情で窺い知ることが困難になった分、「言葉」というものを丁寧に扱う必要があると言える。

「感情が自然と溢れて発せられた、ライブ感のある言葉にこそ、人は感動する。だからいつも周りをきちんと見て、その場で感じることを大切にして欲しい。どんな心の動きがあったか自分の気持ちと向き合うことを続けていけば、人の感情を揺さぶる言葉を自然と発しやすくなる。事前に用意された言葉や、取り繕った言葉は、人の心に残らない」（ラジオパーソナリティ吉田尚記氏）

まったくその通りである。

楽しい時間　１２０

２０２２年９月30日

山本紀久雄

「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その五

慶応から明治へ、一世一元の改元は、明治天皇が即位した慶応4年（1868）8月27日の翌月9月8日になされた。この「明治」という出典は「易経」の中に「聖人南面して天下を聴き、明に嚮かいて治む」という言葉の「明」と「治」をとったものである。聖人が南面して政治を聴けば、天下は明るい方向に向かって治まるという意味である。

「明治」とは、「明らかに治める」という意味にも解釈され、明治天皇治世の性格を的確に示す名称となったように、封建時代から近代化へ、日本は見事に変換したわけで、大成功であった。さて、明治天皇がいかにバランスのとれた君主であったかを三つの側面からお伝えする。

最初は人格面である。明治15年（1882）にチャールズ・ランマン（日本公使館勤務）がその著書「Leading Men of Japan」で次のように書いている。

《ヨーロッパの君主や王族の多くと違って、明治天皇は放縦に身をまかせるということがなく、もっぱら精神を教化することに喜びを見出している。知識を求めるにあたって労を惜しまず、個人的不自由も厭わない。まだ若いにも拘らず（筆者注　当時三十歳）、枢密顧問官の会議には頻繁に出席する。（中略）行政部門をよく訪れ、天皇の出席が望ましいあらゆる公務にも常に顔を出す。科学や文学にいそしむ一方で、専門的な研究に毎日数時間をあてるなど自分を厳しく律する習慣を持ち、それに厳格に従っている。性格においては賢明、断固たる決意の持主で、進歩的かつ向上心に燃えている。治世の最初から天皇のまわりには帝国きっての賢い政治的指導者が配され、これが当然のことながら天皇自身の成長にも役立っている。かくして今世紀の日本の王冠は、偉大なる尊敬に値する人物の上に輝いている》《偏見から自由で、国家の繁栄の増進に有益と思われるあらゆるものを外国から採り入れる熱意ある向上心のある持主》と称えている。

二つ目は、明治天皇の文化的素養である。これも外国からの評価から紹介したい。明治天皇崩御のとき、各国のマスコミは挙げて業績をたたえ、哀悼の意を表しているが、ドイツのアンツァイゲル紙は「日本天皇の詩的宮廷」と題し、歌道に深い教養をお持ちと伝えている。（『明治天皇』渡辺茂雄著　時事通信社1966）

《そもそも日本における古来の伝統は、今日のような現代的な社会にあっても、なおその勢力を維持し、『ミカド』の宮廷をして、ミューズ（詩神）の居所たらしめ、天皇の宮廷は、あたかもトルバドール派詩人（筆者注　南フランスの吟遊詩人の総称）の時代におけるルネーの宮廷のごとく、いずれもみな詩人にして、詩歌をもって談話するも、廷臣にとっては決して不自然とは思われない》

三つ目の側面は天皇と称することである。天皇とは英語でEMPEROR・エンペラーと称され、英和辞典（小学館プログレッシブ英和中辞典）では「皇帝、帝王、天皇」と記されている。『司馬遼太郎対話選集4』（文春文庫　2006）で、ヒュー・コータッ

ツィ（元駐日英国大使）が「今、世界でエンペラーは日本だけ」と述べ、司馬遼太郎は幕末時からであろうと言い、親幕府であった仏のロッシュ公使が、徳川将軍に対してエンペラーと称し、外交文書にもエンペラーと書いていた。

明治維新になって日本国として天皇をどのように英語で称するか検討した際、国王・キングにするとエンペラーであった徳川将軍より下位に位置づけられることになってしまうので、天皇はエンペラーと称することにしたと思われると。

では、今はどうなっているか。エンペラーは軒並み姿を消し、イギリスはクイーンに戻って、その他の国は君主を戴かない共和国という全く違う国になっている。生き残りの鍵は「立憲君主制」である。イギリスと日本だけが「立憲君主制」なのである。

いずれにしても日本の天皇はエンペラーと称され、世界で一人しかいないという現実実態となっている。改めて、日本国の特徴を垣間見た気がする。

このように明治天皇は、人格的にも、文化的にも、国家君主としても、バランスのとれた治世者であったことが各方面からの証言で認識できるが、そのような治世を成すには封建時代と一線を画す環境変化が前提要件として必須であった。その必須変化を招いたものは二つの改革、廃藩置県であり、これと同時に成された宮廷改革であった。

廃藩置県について、伊藤博文はその成果を欧米視察団として赴いたサンフランシスコで次のように演説している。

「数百年のあいだ強固に成立していた封建制度が、一発の弾丸も放たず、一滴の血も流さずに、一年のうちにとりはらわれた。世界のどこの国で戦争しないで封建制度を打破したであろうか？」と。（『明治天皇』　渡辺茂雄著）

確かに、このように大見得きった通り、廃藩置県によって、個々の領地を治めていた大勢の封建領主を辞めさせ、代わって明治天皇が日本国で唯一の支配者となったわけで、近代国家への大きな道筋をつけたことは間違いない。

廃藩置県の最終会議が、明治4年（1871）7月9日に木戸孝允の邸で開かれ、長州から木戸、井上薫、山県有朋、薩摩からは西郷隆盛と大久保利通、西郷従道、大山巌が出席した。会議は、新政府に対する反抗が必ずおきるであろう、その際どういう処置をとるべきかについて、木戸と大久保の間で大論争が続き結論がつかなかった。

じっと黙って二人の論争を聞いていた西郷が「事務上の手順がついているならば、暴動がおきたら鎮圧は拙者が引受申す。ご懸念ない。直ちに実行してください」と発言したことで廃藩置県が決まったのである。

数日後、会議の結果を明治天皇に奏上し、天皇はいろいろ御下問された。明治天皇は当時十九歳十カ月の若さからご懸念つよくご心配されたが、西郷が「恐れながら吉之助がおりますれば」という自信に満ちた奉答に天皇はやっと安心したと伝えられているほど、この当時の西郷の威信は明治維新成立の中心人物として光り輝き、併せて、清廉潔白の人として一般人からも崇敬されていた。

結果として、非難囂々（ごうごう）の反対が多く出されるとの予測は当たらず、明治天皇の勅命として出された廃藩置県に逆らう声は、島津久光の猛反対以外に起こらなかった。

いずれにしても、西郷の支持を得たことと、加えて、当時の各藩が財政窮乏という理由から、藩存続に苦しんでいたこともあって、多くの藩知事が反対に動かなかったのである。

『酔いの徒然』（一二七）

丸山酔宵子

『キリスト教と茶の湯とミサと・・』

９月１９日、エリザベス女王の国葬が全世界注目の中で賑々しく行われた。今世紀には二度と見られないその荘厳で絢爛豪華なウエストミンスター寺院での葬儀そして赤と黒に包まれた葬列のテレビ中継にくぎ付けになってしまった。丁度日本時間の夕食時に重なり、失礼とは思いながら、ワインを飲みながらの不謹慎な鑑賞となってしまった。

国葬の行われたウエストミンスター大聖堂は英国国教会の本山である。元来、英国国教会はローマ・カトリック系の教会であったが、１５４３年英国王ヘンリー８世の離婚がローマ教皇に拒否され、ローマ教皇の支配かを脱し、英国国王を首長とした全世界聖公会（The Anglican Communion）で、プロテスタントの一派となったのであるが、基本的教義や儀式にあまり差異ない。

荘厳な赤の葬列秋の昼

酔宵子

１５４９年、ポルトガルのローマ・カソリックのイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルによって伝えられたキリスト教は、英国国教会がローマ・カソリックと袂を分かって６年目であった。

ザビエルが鹿児島上陸した３８年後、天正１５（１５８７）年秀吉が最初にキリスト教禁止令を出した頃には、全国に４５万人もの信徒がいて、特に高山右近の領地である摂津高槻では領民の８割が信者であったそうだ。

キリシタン迫害が強くなり、キリシタン大名である高山右近は国外追放され最後はフィリピン・マニラで客死した。それから約５００年後、２０１７年2月、カソリックの殉教者として、福者ユスト高山右近として列福されたのである。

右近は利休七哲の高名な茶人でもあった。千利休の切支丹説は定かでないが、利休七哲の蒲生氏郷、牧村利貞は右近の感化によって切支丹となり、他の茶人もキリスト教の良き理解者であったことは間違いないようだ。

福岡藩祖であり「黒田節」で有名な黒田官兵衛は、切支丹大名である高山右近の影響でキリスト教に入信。晩

年の号である「如水」という名前は、旧約聖書に登場する「ヨシュア（Josue）」からとったものである。

戦いに疲れ白百合耶蘇（やそ）の道

酔宵子

「・・・茶の湯は日本ではきわめて一般に行なわれ、不可欠のものであって、我等の修院においても欠かすことができないものである・・・」（アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノ著『日本巡察記』）とも報告されており、キリスト教と茶の湯は、想像する以上に濃密な関係を持っていたようだ。

千利休もミサ（礼拝）の儀式を見ていて、ミサという「最後の晩餐」の再現を茶の湯の中心に取り入れたのではないだろうか。

茶室の「にじり口」は〝狭き門より入れ！〟という聖書の具現化で、茶室という空間で、全てを捨て去り、ただ「主」と「客」という関係の中で、ミサにおける司祭のごとく儀式を司っている。

「キリストの体」である種なし（無発酵）パンと「血」である葡萄酒はミサには欠かせない神聖なものだが、その当時は無発酵パンの代用として茶の湯の菓子である「麩の焼」を使っていたようである。しかし「キリストの血」である葡萄酒は一体どうしたのであろうか・・・。

葡萄酒の無いミサなんて考えられないわけで、矢張りはるばるポルトガルから、船で葡萄酒を運んだのであろう。ポルトガルであるから、ポルトガルの地の黒葡萄品種（セパージュ）であるテンプラーニョであったのか、あるいはカベルネ・ソーヴィニヨンか・・。

虹色に光る十字架秋うらら

酔宵子

青春に年齢などない

高橋育郎

年齢（とし）

青春に年齢などない
人生意気に感じるとき
そこに青春はある
ああ　空はバラ色に輝き
人は　くれないに染まる
生命の泉は　あふれ湧き
血潮はたぎり　胸は高鳴る

青春に年齢は問うまい
人生理想に燃えるとき
そこに青春はある
ああ　山は青く連なり

天空は　ロマンに満ちて
歓喜の鐘は　響き合う
微笑む未来を　この瞳でみよう

＊瞳（め）

青春は意志のあらわれ
人生冒険に挑むとき
そこに青春はある
ああ　スバルの瞬きに憧れて
いざ大海に漕ぎ出そう
帆は風をはらんで時を待つ
宜候　宜候　めざすはあの星

＊宜候（ようそろ）
船を出すときの
船頭の掛け声

絹の話（144）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

絹と黒田節

私が20代の頃、ある結婚式の披露宴のお祝いの席で、黒田節を歌ってしまった事を、50年も過ぎた昨今になって悔い、新郎新婦に申し訳なく思っています。

この歌は一般的に、お祝いの席で歌われているようですが、実は悲恋の歌なのです。

歌の真意は2節の歌詞にあります。

「峰のあらしか松風か尋ぬる人の琴の音か駒ひきとめ立ちよれば爪音たかき想夫恋（そうふれん）」

黒田節の起こり

ある日豊臣秀吉の軍師黒田官兵衛の嫡男で筑前福岡藩主黒田長政の家臣母里（もり）太兵衛（友信）は主君の命を受けて、安芸国広島藩主福島政則（賤が岳の7本槍で有名）が京都に滞在している時、政則のもとに使いに出されました。太兵衛は政則の饗応を受け、酒は好きでしたが、使いの身であるので杯を固辞していると、酒豪の政則はなんとか飲ませようと、黒田武士の自尊心を逆なでする様な挑発をするのです。太兵衛はたまりかねて、頭上に掲げられている日本号（ひのもとごう）の槍を頂けるなら、この大盃を飲み干しましょう、と言って飲み干してしまいました。

慌てたのは政則でしたが、武士に二言は無いものと太兵衛は言い切って日本号持って筑前に帰ると、この話で城下は盛り上がり、歌となって雅楽調から今様風に様々に歌われ始めて今日まで伝わっています。

＊日本号の槍は正親町天皇から室町幕府に下賜され、織田信長、豊臣秀吉を経て福島政則のもとに渡った、世に知れた天下の名槍です。

＊家宝の槍を本当に京都まで持参し、饗応する席に置かれていたであろうか疑問です。

＊現在は福岡市博物館の所蔵品として展示されています。

黒田長政の策略

黒田長政は戦国の世に生まれ、人質に出されて、朝鮮出兵はじめ幾多の戦を生き抜いて、関ヶ原の合戦では小早川秀秋や吉川広家などの西軍の調略に成功して、徳川家康から筑前国名島に52万3千石を与えられ、福岡藩を立藩して初代藩主になった知将です。

ところがそんな人でも恋慕の情は如何ともし難く、母里太兵衛と相思相愛の娘に横恋慕して、なんとかならないかと思案した挙句、太兵衛が遠く使者に立った留守中（往復に日数がかかる）にその娘を側室に迎えてしまったのではないかと思われます。旧知の仲である黒田長政と福島政則の共謀であったのかも知れません。

戦国時代の大名は血族維持のためにも多くの側室をようしていましたが、長政には一人だけ側室がいたと言われていますので、この人かもしれません。

母里太兵衛の断ち切れぬ恋慕の情

名槍を持ち帰った太兵衛の武勇伝はすっかり有名になり、降る星の如く縁談が持ち込まれたと思われます。

しかし彼は主君のもとに行ってしまった彼女への恋慕の情は消し難く、夕暮れ時堀の向こうの彼女が住まわっていると思われる所の反対側に馬に乗って静かに聞き耳を立てていたのでしょう。しかし山の峰に吹く風の音や周りの松風のみが悲しく聞こえてくるばかりでした。

それを知ってか知らずか、毎夕彼女は彼に届けとばかり琴の音を高くかきたてて、切々たる思いを琴に託していました。

琴の音の絹鳴り

太兵は毎夕ここにたたずみ続けたと事でしょう。

この場所は琴の音が耳には聞えないが、琴の音らしき響きを肌が感じたのでしょう。

絹を弦にする琴の音には耳に聞こえる音と、耳には聞えない「絹鳴り」という肌が感じる音があります。

絹鳴りは幸せホルモンオキシトシン（愛情性ホルモン）の分泌を促す音（未確認）で、太兵衛には音は聞こえないが、この場所に来ると自然に愛馬の足も止まり、彼女が届けとばかり高く爪弾く絹鳴りの波長が彼の心を静かに高ぶらせて止まなかったのでしょう。

想夫恋

黒田節では1節では黒田の武士とは云々で、3節以下は花鳥風月をうたっているばかりで、言いたい事は2節の最後の「想夫恋」であろうかと思います。

唐楽に「相府蓮」とうい平調曲があり、この音律で初期は歌われた様です。作詞した人がその相府蓮を想夫恋と書いたのは絶妙な当て字でした。

「江上浩二の独り言」59

江　上　浩　二

見えないスポットライトを浴びる

令和4年9月22日深夜番組を見ていたら、夏の甲子園・高校野球、仙台育英高校が初めて優勝旗を勿来の関を越えさせた努力はいかにというような、注目を得ようとする流れであった。

これまで、東北地方や北海道の高校が野球の甲子園で活躍して、それなりの結果を残すと、それは所謂都市部にある中学の野球経験を積んだ生徒が親元を離れ高校留学をして、地方の地元出身の生徒が極めて少ないチームが編成されたことが大きな要因だと評判となる。しかし、地方の余裕のある学校が増えると、そういった学校同士の競争となり、そうそう特定な地方の高校も甲子園では優勝するのも辛い状況となる。野球以外のスポーツ種目でも、個人競技種目でも高校留学はあたりまえのこととなっているのが実情である。そこで、スポーツという世界、同じルール条件で競争するには、いい選手・いい指導者（監督・コーチ・支援スタッフ）が必要という話となる。時には指導者達の行き過ぎた熱血指導が問題となることも多々世間を賑わす。

今年、令和四年夏の甲子園を制した宮城県の高校では、優勝監督のデータに基づく選手の管理育成　組織論とマネージメントというコンサル事業のキーワードや私が見た他のスポーツとの類似性に少し触れたい。

そのＴＶ番組のコメンテータは過去のトップ選手ばかりで宮城の高校の優勝監督は野球経験ありだが、補欠にもなれない、18名のベンチ入りも出来ない3流と言っていたが、スポットライトも当たらない選手の心を理解し、どう工夫すれば自己改革ができるかを理解し、それを実現して行こう、〈若い子供を現代風ＤＸとデータの見える化を行い初の優勝へ導いたストーリー〉と言えるタイトルがぴったりな内容であった。元高校球児、プロの有名投手を経て監督などを務めたＡ氏は所謂、スポットライトを浴びた側の人間、野球界では限られた一人のスタープレヤーからなる選手投手から構成された古い型のチーム構成でマネージメントをして来た方ではあるが、新しい時代に即した新しいマネージメント手法に共感していた。陸上競技のトッププランナーでオリンピック、世界選手権にも出場し、小さい時から常にトップの位置を占め、野球とは異なった一匹野郎的な個人Ｔ氏であったが、Ｔ氏自身、スポットライトを浴びていたので、当時はそこまで理解しようとも思わなかったようだが、この仙台育英の監督の新しい選手育成能力引き出し法ともい

える手法に共感していた。

私は呟いた、見えないスポットライトというのもあるのかも知れない。最近のグループを主にする歌謡ショーでは踊り振付が優先し、歌唱力は二の次、暗闇のステージにかなりの人数の煌びやかな衣装をまとった若い人たちがパッと浴びるスポットライトはもう一筋でなく、何筋もあり、その筋はどんどん速い動きに合わせて行ってしまい、過去の直立不動の演歌歌手が本当の明るいスポットライトを浴びている様とは全然変わってしまっている。

新しい組織論、マネージメント手法、分担型能力育成、人材の満足度を高めるリーダの存在とお互いの信頼というキーワードを思いついた。例えば、エース級の投手を3人育成し、予選決勝トーナメントを戦う中で単に疲労分散だけでなく、選手の性格、当然ポジションとして要求される機能面も少しずつ異なった面を持ち合わせるように育成することであろう。野球よりチーム人数が多いサッカー、ラグビー、そしてアメフト（American Football）のルールを読み直して、試合当日ベンチ入りできる人数、交代要員、再出場の可否について調べた。数字を上げる前に当然分かることだがこれらはそれぞれのポジションの選手（組織論で言えば異なった階層的役割を持つ人材の育成は違う）の育成練習方法と結果を出した自己の評価も違う事になる。

種目	試合出場人数	ベンチ入り人数	交代可能人数	再出場の可否
野球	9	8	自由	No
サッカー	11	5	(7)(3)	No
ラグビー	15	11		No
アメフト	11	22	自由	可能　何人でも

アマチュアの選手以上にプロ選手の世界では、このような大勢の選手からなるチームの場合の個々の選手の評価が難しい。野球の場合、攻めと守りで大きく違う選手の評価、野手は攻めの打ちで評価され、投手は守り（私は投手の攻めと思う）の投げで評価されるので、一種の団体戦のように思われるが、個人の打点（打率やホーム数）や勝ち数（奪三振数や自責点）で評価されてしまう。

最後にアメフトのルールは究極で、ベンチに大勢が待ち受け、頻繁に交代があり、再プレーも出来て、スポーツ以上の組織運営論へ話が飛びそうになる。アリの大きな集団では働きアリの2割は何もしていないのだそうだ。始めから休憩してスポットライトが当たっていないのではなく、見えないスポットライトが当たっており、それで指図を受けているような如くに振舞っているのではないかと思うのである。

初狩便り（12）

花野みぷり

稲架掛け

稲刈りを終えた稲穂の水分は二〇％ほどあり、このままでは米の貯蔵中に黴が出てしまう。十五％前後まで乾燥させれば長期保存ができる。コンバインで刈り取った籾米は乾燥機に入れて十五％にする。

バインダーと手刈りで刈り取った私たちの田んぼの稲束は、天日（太陽光）と風によって乾燥させる。初狩ではこれを稲架掛けと言う。地方によって、稲掛、稲架、稲棒などと呼び、形も地方ごとに違う。初狩では金属パイプで「うし」と呼ばれる掛け台を作る。日当たりと風通しの良い場所を選び、作業効率と強度のために「うし」をまっすぐに立てる。これがなかなか難しい。まっすぐにしないと風で倒される。米づくりを始めた年は、台風に倒され、大変な労働を強いられた。「まっすぐになってる？」端にいる人に何度も確認しながら設置する。「うし」が出来たら、稲束を運ぶ人、掛ける人に分かれ、二段に稲束を掛けてゆく。豊作の今年は、掛け終わった「うし」が、でっぷりと太っている。天日干しの米は、それはそれはおいしい。

（写真：菅野昌英・朝妻僚子）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2022年10月12日

身体を守って行きましょう

半袖でも大丈夫な陽気になったり
12月並みの気温になったりと
身体に負担のかかる気候ですね
更には
今年は秋花粉の症状が出る方が多く
倦怠感
鼻水
喉の違和感からくる咳
頭痛
などなど一見ウィルス感染の様な症状で
判別が難しいですよね
3S+ゆたぽん+ヨーグルト　はもちろん
手洗い　うがい　アルコール消毒
なども忘れずにやりましょう
手洗いは　30秒～1分以上石鹸で洗いしっかりすすぐ
うがいは　緑茶で30分に1回
アルコール消毒は　手のひらより指先重点
時間が経つと　なあなあになりがちですが
季節柄　免疫が下がりやすくなっています
しっかり身体を守って行きましょう
今日も笑いながら行きましょう

2022年10月14日

手荒れが酷くなる前に

一雨ごとに気温が下がり
秋を感じる今日この頃です
まだ
雨が降っているうちは湿度があり
乾燥はそれほど気になりませんが
気温の低下とともに乾燥が始ります
アルコール消毒や手洗いで
手の乾燥が進み荒れてきてしまいます
例年 本田のひとり言 でも書かせてもらっていますが
ワセリン　がお勧めです
ベトベトする　という声が多いのですが
ワセリンは下地にして
その上からサラッとしているクリームを塗ると
手洗いやアルコール消毒でも上のクリームは落ちますが
下地であるワセリンは残ります
ハンドクリームだけワセリンの上に定期的にぬれば
手荒れはかなり防げます
きっちり感染予防も今まで通り出来るうえ
手荒れも予防出来ます
荒れ始める前に
今から肌も予防して行きましょう
今日も笑いながら行きましょう

康鍼治療院（www.yasuhari.com）　玄　翁

「平和の和」

〝和〟の言葉の語源では
〝和〟とは音を出す笛が
それぞれの音を持ちながら
合わさる事で　出す楽器
それぞれ音色（ねいろ）が合わさると
和音や旋律　あらわれて
個では出せない　色となる

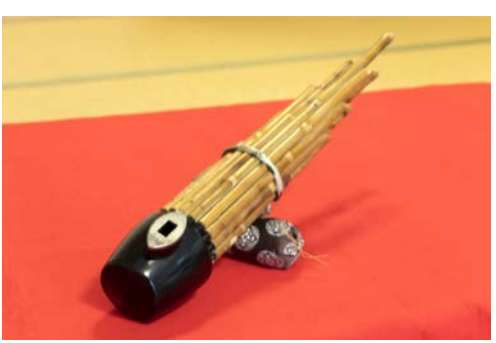
それぞれ音色（ねいろ）・個性があって
他（ほか）の色との交流で
関係・調和が見出せる
音と音が合わせれば
新たな音楽うまれるぞ

一つの音色だけならば
和音や音楽作れんぞ
他の音があるからこそ
新たな音楽生まれてくる

和と同は違うぞよ
同とは　個の色無くすこと
相手に合わせて　個を無くす
個の無い　存在　色がなく
すべてが単調　飽きてくる
同とは　ひっこめ　我慢して
積もり積もれば　イライラし
吹き出し　争いうまれるぞ

この和の意味での平和とは
すべてが平（ひとし）く　存在し
個と個が時に合わさって
表現しあって　交流し
新たな音楽・表現が
作り出されて　調和する

これが和の意味
和音は調和
本当の意味での平和の和



「味覚の意味」

味覚は味を識ることなり
意識にのぼる感覚で
最も生命と関係す
味覚は人を育んで
心も身体もつくりだす
味覚は未来をつくりだす

食べたら　食べ物口の中
口で感じて　舌で味わう
味わい　美味しさ感じれば
味覚は　心に作用して
五臓六腑の精となる
味覚自体が栄養で
気血となって　心身を
刺激し　動かし　成長させる
味覚は未来をつくりだし
味わい　人生豊かにす

食べる時には咀嚼して
よくよく唾液を出すことで
食から味覚が生み出される

味わうことで　胃腸へと
栄養・内容　伝えてる
それにて　消化の準備して
腑に落ち　心身満たされる

食べても　味わうこと無きは
胃腸の負担で消化され
もたれて　疲れて　怠くなる
何かしながら食べるのは
咀嚼疎か　唾液出ず
味わうことすら忘れてて
ただただ餌の様になる
餌では未来はつくられぬ

食べる時には味わって
ゆったり楽しみゃ　豊かに
なる
人の心は味覚が育て
未来は味覚が作り出す

清月閣大人に寄す

水誠先生の信書を拝読し作有り　　櫻臺楼主人　精真

北に白水を観て魚鱗を楽しみ
南に青山を眺めて友の真を思う
比翼の鳥は棲む清月閣
良宵宴を倶にし心身を委ぬ

寄清月閣大人　拝読水誠先生信書有作

櫻臺楼主人精真　令和四年八月十日

北觀白水楽魚鱗　南眺青山思友眞
比翼鳥棲清月閣　良宵倶宴委心身

（水誠先生のお便り）……南に皿倉山を仰ぎ北には小川があり、多く魚が遡上し水鳥の飛来が堪えません。小生と愚妻はマンションの九階で生を食っております。山は青く水は清く吟友は素晴らしく、こんなに恵まれた命に感謝感謝のみです。夕方　妻との酒宴に清風と清月に全身を委ね我が身を愛おしんでいます。……。

※私には五十年来の知己がある。北九州の他流の先輩吟士である。吟を始めて間もない頃、北九州市でコンクールや大会があるとロビーで「又会いましたね」と親しげに実に柔やかな顔で声をかけて頂いたのが、今日の布谷水誠先生である。確か十年ほど吟の先輩であった。この道、先輩後輩がとかくうるさく言われるかも知れない。私は布谷先生のお陰で、先輩とは自ら目下の者に優しく声をかけてこその先輩、と言う考えが根付いた。礼節は上の者から範を示すものであると。偶には門司や小倉で呑むこともあったが、若い者同士交歓会を催すことになった。二回目は私が受け持ち、私共の会長別宅「龍吟堂」で行った。庭と座敷を観客席に池の向こうが尺八と吟者の舞台とした。始めは池をはさんでお互いの会詩を合吟して合流し交互に吟じ合う和やかな交歓会となったが、今思っても若々しくて格調高くいつまでも誇りとする思い出となった。北九州を離れて三十八年お付き合いは続いている。

そんな水誠先生からお中元が届いた。差し上げたり戴いたりだ。これも良いかも知れない。同封されたお便りは何回となく読み返すものだった。心洗われ、段々と詩の言葉になった。詩中の語により水誠先生を「清月閣大人」と勝手に呼ばせて頂き、詩中時折（櫻臺楼主人）が（清月閣大人）になりすました。

編集室だより【二〇二二年九月】

今泉 由利

だいたいのことが「上の空」状態で過ぎてきてしまった。自身の心すら、しっかりコントロールしないまま生きてきてしまったことに、やっと気付いたところ。

この度の「隠岐島への旅」にて、自分の昔が蘇ってきた。物心ついた頃からを、振り返り、その時々の、私のまわりにいて下さった方々に思いを馳せた。

何が、どんなに良かったか！悪かったか！自分の一生を、自分好みにしてあげなくてはいけない。自分にしっかり付き添い、能力の限りを尽くしてみよう。

隠岐島帰りになってより、どんなことをしていても、隠岐島での場面が浮かぶようになった。後鳥羽上皇、隠岐国海士町に、ご配流となったこと、十九年間にわたる「遠島御百首」を詠まれたこと。海も空も隠岐島も、そこでのひとことひとこと、時代を離れてはいても、私が直面させていただけたことを。

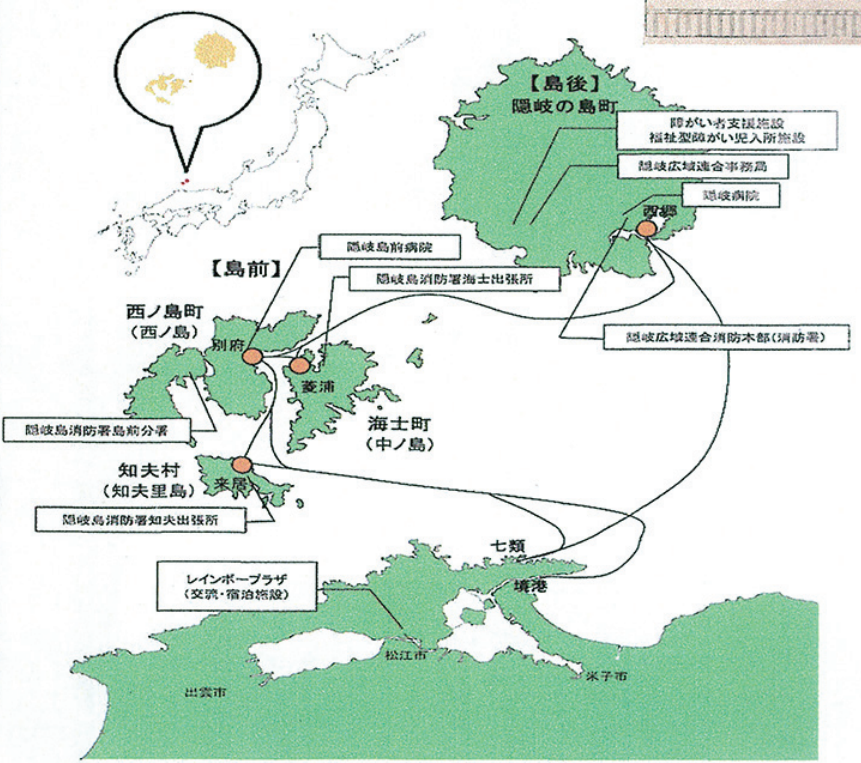
日本から一番遠い国、ということだけで、出掛けていったアルゼンチン。四十五日間の船旅の末、たどり着いてしまった。三ヶ月間程、ただただ涙を流し続けていたけれど、涙が涸れて、外に出て、輝かしいアルゼンチンの生活を知る。

沢山涙を流したから、もう涙は終ってしまったと思っていたのに、「遠島御百首」を読ませていただき、まだ私に涙が沢山残っていることを知る。

岳精流日本吟院　川口カルチャー　吟行会

吟題集

隠岐の島



令和4年8月2日～4日（2泊3日）

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇-〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三-四五-三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　090-8434-8646
TEL　03-6765-5838
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利